

日本の将来を考えたい

第 15 回 「一紅会」主催 春の講演会

井上 栄 (昭和 33 年卒)

いのうえ さかえ
東大医学部卒、同大学院修了 医学博士
元・国立感染症研究所感染症情報センター長
2001 年大妻女子大学家政学部教授 (健康教育)
母子健康手帳活用推進協会会長



左から清水幹事長、一紅会瀧田幹事、井上講師、一紅会飯田会長

一紅会は創設十五年の節目を迎えました。
この間一紅会を支えて下さいました多くの同窓生の皆様に戻心より感謝申し上げます。ありがとうございます。
思い起こしますと平成八年、甲府中学・一高東京同窓会の活性化のために少しでも貢献できればとの思いから女性ネットワークを立ち上げました。
平成九年三月七日十七名の女性幹事により東京会館で設立会合を開いたのが昨日のこのように思われます。
以前東京同窓会は長い間上野精養軒で行われていました。三百人程入る会場には男性卒業生が大半を占め、僅かな女性は後ろの片隅に肩身が狭そうにして参加していました。治安もあまり良くありませんでしたので、薄暗い不気味な公園の中を足早に会場に向かったのを思い出します。
そんな折に、三十二年当番幹事が会場を精養軒から銀座東武ホテルに移してくださいましたのを機に、翌年三十三年当番幹事として私は、さらに会場を女性も参加し易いように交通が便利で広い東京会館に移しました。そして一紅会幹事は首都圏在住の女性卒業生達に声をかけ、一人でも多くの方に同窓会へ参加するように促しました。
そうした中で開催しました平成九年の同窓会は、参加者が飛躍的に増えて女性五百名近い参加者を得て、華やいた同窓会で大盛況でした。これがベースとなっ

三月十日の春の講演会ではたかさんの人から「良かった、面白かった」との感想をいただき、演者としては話し甲斐があったと満足しております。

この講演内容に関しては、一紅会会長の飯田富美子さん(昭和三十三年甲一卒)の意気込みを感じていました。三・一一大震災のあと人の絆の大切さが認識されましたが、飯田さんは私が大学でやっている「母子手帳教育」が親子の絆を強めるのに役立つとの話をどこかで聞かれ、一紅会講演会でも話して欲しい、と私に言ってきたのです。昨年の九、十月に他所で行った私の講演に井上若子さん(昭和三十年卒)と一緒にわざわざ聴きにいられて、感想を述べてくれました。その後も何回かの打ち合わせをし、本講演では女子学生の母子手帳感想文の朗読を甲一同窓の若手俳優・神谷(石井)ひとみさんに頼むという演出までもしていただきました。

さて、少子化がそのまま進めば日本という国はいずれ消滅します。現在生きている我々には、子孫のために、自分の寿命を超えたはるか先の日本の将来を考える責任があるでしょう。講演では少子化対策として次の二つの提案を述べさせていただきました。
青年期の若者に母子手帳を母親と一緒に見させる教育は、親子の絆を強めるだけでなく、この教育が全国に普及すれば、子ども虐待防止にも少子化対策にもなるでしょう。高校高学年から大学新入生を対象にするのが良いと考えています。今まで母子手帳

帳が教育に使われる場合は、小中学校で児童生徒に自分の予防接種歴や成長記録を調べさせることでしたが、それはまったく違った目的になります。この教育に副読本が必要と考えていたところ、大修館書店が秋に出版してくれることになりました。

第二の提案ですが、若い夫婦が二人以上の子を実際に産める社会にする必要があります。現代の核家族社会では、①高齢者は子と同居しないので面倒をみてもらえない、②若夫婦の子どもは年寄りに面倒をみてもらえない、③ことがあります。①に対しては二〇〇〇年に介護保険制度が出来ましたが、②に対する社会制度は出来ていません。経済が振るわず給料が下がる時代、夫婦共稼ぎでない家庭が持てません。その状況では子どもが欲しくても若い夫婦は産むことができません。少子化はさらに進みます。これに対しては、保育所無料・全入の制度を作ることが必要です。保育所の施設には少子化で廃校になった小学校を使えます。全入にすれば保育士が不足しますが、それに対しては、子育ての経験を持つ熟年女性を活用する仕組みを作るのが良いでしょう。さらに、熟年女性が子育て家庭へ「訪問保育指導」をすれば、子ども虐待も減るでしょう。将来の日本を考えると、①よりもむしろ②の対策の優先度の方が高いのです。

ところで、与えられた講演時間は九十分とたっぷりありましたので、そのうちの三十分は日本の風土の特徴についても話しました。私は三十代の後半に国際協力事業団 JICA の仕事でインドネシアに何回も行き、

緑の絨毯に覆われた美しい風景を見て、そこが日本と同様の火山国であり、火山灰や温泉水に含まれるリン酸やカリウムが植物の生長に役立つっているのでは、と考えるようになりしました。降水量が多く火山が多い国(日本とインドネシアのみ)では植物・食物が豊富であるという自然の恵みがあるのです。一方、火山がある場所では噴火・地震・津波の巨大災害がときたま起こります。そのような風土で日本人は、縄文の昔から天災のときお互いが助け合ってきた。その災害時に自分勝手に行動する人は生き残れなかったでしょう。つまり、助け合いの遺伝子が「自然選択」されてきたとも考えられます。弥生時代以降の水田稲作では共同作業が必要で、さらに助け合いの精神が醸成されたでしょう。日本社会の基盤には「人の絆」の遺伝子と文化がある。この後半の話の方が前半の母子手帳の話より面白かった、とある人(男性)から言われました。

私は戦前に生まれ、日本が敗戦後の貧しさの中から高度経済成長をして「Japan No.1」と言われた時代を経験しました。その後は「失われた二十年」でした。今、世界を見ると、人類は物質文明と環境破壊との相克の中にいると言えるでしょう。三・一一震災・原発事故の国難を乗り越えた日本人が、世界に新しい生き方を示せるかもできません。若い人には、日本の風土と歴史の特徴を知り、自信と誇りを持って自国を愛し、この国が将来も持続するように努力をしていただきたい、と願っております。

究同好会は今年で十二回を数え、富山県へ歴史散策紀行を実施しました。更に、来年山梨県で開催される第二十八回国民文化祭に参加の第九を歌う会では一紅会幹事を中心に歌好きな面々がレッスンを励んでいます。



○●●●●●●●●●●●●●●●●●●○
○●●●●●●●●●●●●○

一紅会の未来にエールを!!!

一紅会会長 飯田 富美子 (昭和 33 年卒)



毎年立派な同窓会が行われるようになり、一紅会創設当初の目的がそれなりに達成されたのではないかと自負しています。
一紅会活動の最大行事は、平成十年一月より毎年実施している「春の講演会」です。同窓文化の発展に寄与するために企画した講演会ですが、いづつかみなさんの知識欲と相まって、お陰様で回を重ねる毎に参加者も増えて好評裏に実施し続けております。
財政的なこともありますが、様々な分野で第一人者として活躍されている同窓生が綺羅星の如くいらっしゃいますので、講演会の講師は同窓生にお願いしています。今まで十五名に講師としてご協力を賜りましたが、毎回会場満杯にご参集の皆様と一緒に言い尽くせない感謝を頂きました。講師の先生方には深くお礼を申し上げます。
講演会を十五回も重ねております、思い出も沢山ありますが、中でも昨年の第十四回講演会は特別なものがあります。開催日が三月十二日、巨大地震の翌日でしたので、やむなく当日早朝に中止を決定しましたが、僅か四時間足らずで、全参加者三十四名様に連絡完了しました。辛い決断でしたが、一紅会の確かなネットワークと強い絆を改めて確認できたのは大きな収穫でもありました。第十四回講演会はその後場所と日程を変更して盛況に催行することができました。また、講演会を起点に生まれた歴史研

一紅会は東京同窓会の一翼として設立当初の目的を果たすべく努力してまいりました。これからも新役員と六十名の幹事が心を一つにして同窓文化の灯明を燈し続けて行くことでしょう。未来を見据えた魅力的な一紅会の発展のために。これからも変わらぬエールを宜しくお願ひ致します。
最後に 私事一紅会会長として八年有余を充実に有意義に、そして楽しく過ごすことが出来ました。
一紅会幹事はじめ同窓生皆様のご指導、ご支援に厚く御礼申し上げます。